

なぜ何も欠けることがないのか？

詩編 23 : 1-6

導入

わたしたちは、だれしもが「欠けだらけのわたし」と謳うわけですが、詩編23篇の作者は、なぜわたしには何も欠けることがない。と言っているのでしょうか？ 1節だけを見れば、主がわたしの羊飼いなので、すべての必要を与えてくださいます。になりますね。乏しいことはありません。とはすべての必要が与えられます。となります。

ダビデという名前は、そもそも愛されている者という意味ですから、それだけで、何も欠けることがないですね。その点では、わたしたちも同じです。それを確かにしているのが、主がわたしの羊飼いですから、ですね。羊飼いは、名詞ではなくて、分詞になっているので、主がわたしの羊飼いですから、と訳すのが正解です。必要なものはみな与えてくださいます。リビングバイブルの訳がもともと賛美された内容に最も近いですね。しかも、わたしには欠けることがない。決して。となっています。

本論

主がわたしの羊飼いですから、わたしには欠けることが何もない。と言っている理由、それは、詩編23篇を見渡せば、(1) 何度でも魂を生き返らせてくださる。ということですね。3節

わたしたちは、土の塵で形づくられ、命の息を吹き入れていただいて、生きる者となりました。塵の大きさは、0.000,000,001メートル。塵の大きさは、ナノという単位ですね。わたしたちのからだは、このナノレベルの小さなものからできているんですね。そして、太陽を向いているひまわりの花のように、神さまの方を向いて生き生きと生きる者、生きていくために、生活するために必要な糧を維持できる者、支え合って生きる者、何度でもやり直せる者というのが、土の塵で形づくられ、命の息を吹き入れられて、生きる者となったという意味ですね。それらが崩れ去っても、何度でもやり直せる。魂を生き返らせてくださるんですね。創世記2 : 7

必ず、何度でもわたしの魂を生き返らせてくださる！と言っていますよ。この恵みは、わたしたちが息を引き取る時、主が、子よ、帰りなさい！と声をかけて迎えてくださるのと同じことばですよ。皆さん！

順序が逆になってしまいましたが、2節には、主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、とありましたが、緑の牧場に伏させ、も、憩いのみぎわに伴い、も、いずれも、休ませることを言っているんですね。わたしたちは、主に出会って、まずは、休ませていただいて、生き返らせていただくところから出発します。主が明確に主導権をとってそのことを導かれることが明記されていますね。

わたしには欠けることが何もない。と言っている理由、それはまた、(2) 主は
み名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる。からですね。

わたしが導かれる正しい道は、主のみ名にふさわしく、なんですね。聖書には主
のみ名が39通り描かれているのですけれども、聖書に散りばめられたキリストのみ名を、
キリストがどのようなお方かを味わうことで、わたしたちが導かれる道があるということ
ですね。世界の名だたるオーケストラと共演されてきたある日本人バイオリニストが、バッ
ハは一生かけて登る山だと言っていますが、わたしたちにとって一生かけて登る山は、聖書
であり、そこに描かれた主のみ名ですね。わたしたちが歩く道の正しさは、主のみ名で測ら
れるのですね。

4月から新しく始まる JTJ の土曜日の講座で、少人数制の講座で取り上げさせ
ていただくのが、イエスの39のみ名です。イエスさまのたとえ話も併せて辿らせていた
こうとしているのですが。

わたしには欠けることが何もない。と言っている理由、それは、(3) 主が共に
おられて、主の鞭と杖がわたしを力づける。からですね。4節

主が共におられる！ということが、ここでは、主の鞭と杖と表現されています。
主の鞭と杖は、わたしを懲らしめるものではなくて、力づけるものなんですね。箴言にも、
鞭が出てきますね。鞭を控えるものは自分の子を憎む者。子を愛する人は熱心に諭しを与
える(13:24)。子どもに鞭を惜しむ者は、子どもを憎む。子どもを愛する者は、訓戒を
探し求める。と直訳できます。子どもに鞭を惜しむを物理的に鞭をくわえると理解する必要
は無いですね。羊飼いは、羊の体にむちを当てることは決してありません。むしろ、子ども
を愛する者は、御霊の実である忍耐の限りを尽くして、主の訓戒を学ぼうとする。福音書の中
にそれは、汲めども尽きず描かれています。主の鞭と杖は、災いからわたしたちを守るため
に、力づけるためにあるんですね。主が共におられることがわかります。

どれだけ力づけられると思いますか？それは、ヨブが立ち上がることができた
ほどにです。ヨブ記の最後のヨブの肉声である「わたしは、塵灰の中で、悔い改めます。」
この悔い改めますには、顧みられました。慰められました。解き放たれました。という意味
があることを以前申し上げた通りです。

さらには、わたしには欠けることが何もない。と言っている理由、それは、(4)
主の食卓を整えてくださる。からですね。5節

主の食卓は、いのちの糧をいただく場所ですね。和解が導かれる場所でもありま
す。歴史的な調印式では、テーブルが用いられてきました。双方がテーブルについて、和解
に署名するんですよ。

結び

まことに恵みと慈しみがわたしが生きている間わたしを追ってきます。そして
わたしは永遠に主の家に帰ったのです。6節

詩編23篇の作者は、なぜわたしには何も欠けることがない。と言っているのでしょうか？と問いかけさせていただいて、その答えを辿らせていただいていた中で、唯一完了形で記されていたのが、わたしは永遠に主の家に帰ったのです。

今朝、わたしには新しい発見、気づきがいくつかあったのですが、中でも一番の発見、気づきは、なぜわたしには何も欠けることがないのかを問かける時、わたしたちは、わたしは永遠に主の家に帰ったのです！とここから始めるということですね。主の家に帰ったところから、主が何度でもわたしの魂を生き返らせてくださる！休ませてくださる！主がわたしたちを正しい道へとみ名にふさわしく導いてくださる！主が共におられて、主の鞭と杖がわたしたちを力づけてくださる！主が食卓を整えてくださる！主がわたしの羊飼いですから、とはそういうことではないですか？